

《書 評》

フェミニズムが正義を取り戻すためには
——ナンシー・フレイザー『中断された正義』を読んで——

Justice in Feminism

気 駕 ま り

Mari KIGA

Studies in Humanities and Cultures

No. 4

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 4号
2006年1月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
JANUARY 2006

書 評

フェミニズムが正義を取り戻すためには —ナンシー・フレイザー『中断された正義』を読んで—

気 駕 ま り

ナンシー・フレイザー著「中断された正義」によると、現在、アメリカにおけるアカデミックなフェミニスト理論は袋小路に陥っている、という。では、日本においてはどうかであろうか。欧米のフェミニズム理論に多くを学び、議論を展開している日本のフェミニズムやジェンダー論の現場も、袋小路といった意味では同様の困難に直面している、と言えないだろうか。

アメリカのフェミニズム系政治哲学・正義論の学者であるフレイザーは、著書「中断された正義」において、このフェミニズム理論の行き詰まりを、いかに乗り越えるか積極的に論じている。⁽¹⁾フレイザーの考えが、そのまま日本のフェミニズムの現状にあてはまるかどうか疑問だが、両社会が抱える困難の相違点を知るだけでも意義あることのように思える。また、その打開策を参考にできるのならば、と考えればじっくり読んでみても損にはならないだろう。

袋小路から抜け出すためには、まず議論を整理することが必要である。行き詰まりの原因を探ることによって、次に取り組むべきテーマが明確になってくる。「中断された正義」第7章「多文化主義、反本質主義、ラディカル・デモクラシー」において、このことが取りあげられている。この中でフレイザーは、第二波フェミニズムの歴史を振り返りながら、問題点がその内部でどのように形成されていったかを指摘している。そして、第1章「再配分から承認へ」で、その問題への取り組み、対社会への政策としてひとつの案を提示している。したがってここでは第7章と第1章をとりあげてみようと思う。

*

*

フェミニズム的正義は、いったいどこで中断されてしまったのか。第7章で試みられているのは、その原因を探ることである。フレイザーは、今日「ポスト社会主義的」時代のラディカル・デモクラシー論に、問題がある、としている。その議論は行き詰まり、政治経済の問題から切り離されたアイデンティティ・ポリティクスの領域に留まり続けているというのである。一方でこの図式は、フェミニズムの議論にそっくりあてはめることができる。ならば、フェミニストの議論を再構築することによって、ラディカル・デモクラシー議論の打開点が見つかり、説得力のある展望が開けるのではないかと考える。

フェミニズムの「利用」は、その中心課題、差異をめぐる議論を整理することから始まる。議

論は大きく3つの段階に分けることができる。60年代後半から80年代半ばまで続いた「ジェンダーの差異」をめぐる議論。80年代半ばから90年代前半までの「女性たちの間の差異」をめぐる議論。そして90年代前半から今も続く「増殖し続ける多様な差異」をめぐる議論。

第1段階の議論は、平等のフェミニスト対差異のフェミニストといった構図で表される。平等のフェミニストは、ジェンダーの差異を有害なものみなした。それは、この社会の男支配を行うための合理的手段であり、結果的に女性への社会的な財の不公正配分を生み出しているからである。平等のフェミニストは、いわば従来の女性解放運動の理念をストレートに引き継いでいる、といえよう。男女共同参画やジェンダーフリーといった概念が、時に所によって理解されない日本社会は、この段階にあって、平等のフェミニストの仕事は山積み状態と言えるかもしれない。70年代後半になって登場した差異のフェミニストは、これに反して、ジェンダーの差異は女性のアイデンティティ形成の場でもある、と主張した。平等主義者は男性中心の規範を前提とした「平等」を要求しており、これは女性性を過小評価するものであり、性差別主義を再生産することにつながる。男性なみになるのがフェミニズムの目標ではない。女性は男性とは違うが、劣っているわけではないし、むしろ優れた面（平和友好的?）もある。差異のフェミニストはジェンダーの差異を承認し、女性の性を積極的に肯定、評価しようとしたのである。これは、エコロジカル・フェミニズムという形で80年代日本でも広く受け入れられた。第1段階の差異をめぐる議論は決着はついていないが、重要な洞察を我々に与えた、とフレイザーは指摘する。すなわち平等のフェミニズムは、女性を社会的平等に扱うことなくしてジェンダーの公平はない、ということ、差異のフェミニズムは、男性中心主義を乗り越えることなくして、ジェンダーの公平はない、ということである。

第2段階の議論は、レズビアンや有色の女性フェミニストたちのこれまでのフェミニズムに対する異議申し立てから始まった。アメリカの主流のフェミニズムは、すべての女性のものではない。それは中産階級白人の異性愛者女性を対象にしたものであり、彼女たちの立場を特権化することによって、人種差別主義、異性愛主義などを再生産してきた、というのだ。この女性たちの間の差異に関するフェミニズムによって、最も実態が暴露されたのが差異のフェミニズムである。評価すべき女性性のアイデンティティとされたものが、前述した白人女性のものでしかなかったのだ。これでジェンダーの差異のみに焦点をあてることは、不可能になった。多様な差異をめぐる闘争の中で、そのひとつとしてジェンダー闘争がおこなわれる必要性が出てきたのである。

第3段階にいたって、フェミニズムはある意味ラディカル・デモクラシーと合流する可能性があった。政治化された差異全般を何らかの形でフェミニズムと繋げ、理論化する必要性があったからである。しかし、それは結局のところ、差異のフェミニズムの欠陥矯正の中に留まり続けることになる。反本質主義と多文化主義という形で。議論はアイデンティティと差異に関する一方的な視点に片寄ってしまい、当然のごとく文化的承認という不公正の問題にしか関わることが

できない。とはいえ、反本質主義は、フェミニズムの中で最も先鋭的で期待の大きい理論ではないだろうか。⁽²⁾ 反本質的フェミニズムは、差異やアイデンティティは言説的に構築される、たとえばジェンダーもさまざまな文化的プロセスを経てパフォーマンスに創られる、とみなす。文化における規範的なポリテクスを、差異に関する存在論的な概念から演繹する、すなわち「女性」がいかに作りあげられたか、そのプロセスを暴露することが、この理論の目的である。この脱構築的戦略は、ジェンダー以外の他の差異の脱構築的な社会運動と同盟を結ぶと有効だろう、とフレイザーは言う。しかし、不平等を追求していく力は弱い、と指摘する。アイデンティティや差異が、支配の社会構造や不平等の社会関係性とどう関わりあっているのか、この方法だとなかなか見えてこない。また、すべてのアイデンティティが抑圧的で、排他的、といった夜の論理に屈してしまう危険性がある、と警告する。

多文化主義はどうか。差異を文化的多様性として肯定する多文化主義の中でも多元主義的な多文化主義は、差異を無条件に称揚する。政治判断抜きで、あるがままの集団アイデンティティを評価する多元主義的多文化主義は、いわば第1段階の差異のフェミニズムの焼き直しである。したがって、同じ構造的弱さをもっているといえよう。この理論は、脱構築的反本質主義の鏡像である、とフレイザーは言う。前者が全ての差異やアイデンティティを無差別に称賛する一方で、後者は、全ての差異やアイデンティティを非正当化するのである、と。結局のところ両者とも、同じ土俵の上で、差異やアイデンティティの解釈をめぐる論争しているのである。以上フェミニズムの歴史および現状、問題点は、そのままラディカル・デモクラシーにあてはめて考えることができる。私たちは、解決し損なった古い議論の軸を捨て切れずにいるのだ。再配分（平等）と差異の承認をつなぐ糸口が見つけられなかったため、後者、差異をめぐる文化的ポリテクス内の議論ばかりが肥大していった、と考えられる。

文化的差異は社会的平等という基盤においてのみ、自由に練り上げられ、民主主義的に媒介される。⁽³⁾

まさにその通りである。困難かもしれないが、私たちは再配分と承認の要求闘争を繋ぐ努力をしなければならないのだろう。しかし、疑問も残る。なぜ人々は自らのアイデンティティと民主主義の親和性を議論しないのか。社会的平等という理想像の上で、自分が体験したアイデンティティを客観的に評価することに、何か根源的な恐怖や嫌悪を感じるというのだろうか。フレイザーはこのような心理学的な要因について論じていないが、原因の1つであろうこの部分が解明されれば、行き詰まりの議論は大きく方向転換するように思える。

*

*

「再配分の問題なくして承認の問題はありえない」、フレイザーは反本質主義的な多文化主義のための闘争と、社会的平等のための闘争を繋げる方法を、第1章で探っている。現実社会の抽象化された集団モデルを使用して、議論を進めているため、結論は1つの具体的政策となる期待

がある。

再配分、承認、一方のみの要求を行っている集合体を最初に仮定する。まず、取り上げられるのはマルクス主義の労働者階級である。資本主義社会の中で不公正な労働負担を背負われ、不当に低い賃金しか得ていない彼（女）らの理不尽な状況は、社会の政治経済的構造に根ざしている。文化的構造ではない。よって彼（女）らは、承認ではなく、再配分を要求する1価的集合体モデルとして考えられる。

次に侮蔑されるセクシャリティが取り上げられる。セクシャリティは政治経済に根ざすものではなく、社会的差異の一形態である。⁽⁴⁾ 彼（女）たちは、異性愛文化の中で差別され、非難、屈辱をうけている。ゲイやレズビアンの人々の中には深刻な経済状況の人もいるが、同性愛者差別ゆえにそうなったと考えられる。よって彼（女）らが要求するのは自らのセクシャリティの再評価であり、この集団は再配分ではなく、承認を要求する1価的集合体モデルとして考えられる。

この2つの集団モデルの要求に対する解決策は、まったく正反対であることは、興味深い。労働者階級は、不公正を解消するために、プロレタリアートという差異を最終的に破棄しなければならない。逆に侮蔑されるセクシャリティは、集団としての独自の価値を高めなければならない。では、この2つの集合体の性質を併せ持った集団であったら話はどうなるのか。2価的集合体モデルとしてあげられる最も適切な例は、ジェンダーである。ジェンダーは、ある意味極めて政治経済的である。ジェンダーを口実に有給労働と無給労働（家庭内労働）が成り立っているし、有給労働をプロフェッショナルな労働とピンク・カラーの労働に分割する構造を生み出しているのもジェンダーゆえといえる。ジェンダーは再配分的不公正の一種であり、これを解決するためには、ジェンダーそのものを廃絶してやるしかない。しかし、ジェンダーは侮蔑されるセクシャリティと似た面も持っている。女性は男性より劣った者という見方、それに基づくさまざまな性差別は、男性中心文化の中で生み出されたと理解できる。とすれば、女性を劣位におく文化的評価を変化させるため、ジェンダーを再評価することをしなければならない。ジェンダーは、積極的に承認しなければならないのである。これこそ、まさに再配分と承認のジレンマである。一方の要求を強めれば、結果的にもう一方の要求を損ねることになるのである。このことは、二価的モデルである人種、民族にも言えることである。

ここでフレイザーは2つのアプローチ方法を提案する。そして、再配分、承認、それぞれの要求にこれらがどう機能するか考察をしていく。1つめとして、肯定的治癒策があげられる。これは、社会的基盤をかき乱さず是正することを目指す方法で、現在、多文化主義と呼ばれるものに関連する。歴史的には、リベラルな福祉国家と結びついてきた。2つめとしてあげられるのは、変革的治癒策である。問題を発生させている社会的基盤そのものを再構造化することによって是正を目指す方法で、現在、脱構築と呼ばれるものに結びついている。歴史的には、社会主義と結びついている。この2つのアプローチを、前述した侮蔑されるセクシャリティにあてはめてみる

と、肯定的治癒策は、ゲイ・アイデンティティ・ポリティクスとなり、変革的治癒策は、クイア・ポリティクスに結びつけられることになる。階級ではどうか。肯定的治癒策としては、社会保険プログラム、公的援助があげられる。変革的治癒策としては、普遍的な社会福祉プログラム、累進課税、基本的な社会経済政策への民主的な参加などがあげられる。このことから、肯定的治癒策は、差異や階級を促進化していくのに対し、変革的治癒策は差異や階級を不安定化させる、ということが明らかになる。では、これを2価的集合体モデルにあてはめて、最もそれぞれの要求（再配分と承認）を損なわない方法は何か、選択することが可能となってくるであろう。フレイザーは、水平軸に肯定と変革、垂直軸に再配分と承認を配置したマトリックスを考案する。これを使えば、2価的集合体にとってどの方法を選択するのが1番摩擦が少ないか、合理的に判断することができる。それによれば、ジェンダー的不公正を正す最も有効な組合せは、変革的再配分と変革的承認ということになる。経済領域における不公正の是正は、社会主義フェミニズムの理論を用い、文化における不公正の是正は、脱構築的フェミニズムの手法を用いるのである。実際この2つの戦略は衝突しないのだろうか。フレイザーはジェンダー二元論にゆさぶりをかける脱構築的フェミニズムの長期目標は、社会主義的フェミニズムの再配分と矛盾しない、と述べている。しかし、文化において脱構築された人々が、おとなしく社会主義的政策を受け入れるのか疑問である。また、社会的平等を先に確保して、ジェンダーの解体にとりかかるとしても、人々の意識はその方向に向かわないかもしれない。フレイザーは、この選択のひとつの弱点は「どちらのポリティクスも、大部分の女性の現在文化的に構築されている身近な関心やアイデンティティから隔たっていること」と、さらりと述べているが、この背後にある問題はかなり深刻であると考えられる。

*

*

フェミニズムすなわち女性解放運動の目標は両性の平等である。選挙権の獲得という基本的な法の上での平等の達成、その先には、両性の平等を現実社会で実現させるためには、どう法を改革していけばいいか、という問題が果てしなく続いていたはずだ。両性の平等という正義、生身の女性の権利をどう扱っていくのか、フェミニズムは絶えずそこに戻っていく必要がある。「中断された正義」は、そのことの重要性を再認識させてくれた。たとえ、現実社会から遊離した所で議論が展開せざるをえない場合でも、問題の本質は、しっかりと原点に結びついている必要がある。フレイザーが第1章で展開した理論の現実社会での明確化は、それを具現化したものといえよう。

しかしながら、アメリカと日本のフェミニズムの違いも認識できた。アメリカのフェミニズムをはじめとしたラディカル・デモクラシー理論は、アイデンティティ・ポリティクスの領域にとどまり続けているがゆえに議論が停滞している。そもそも日本社会に、アメリカ社会のアイデンティティ・ポリティクスに匹敵する核になるような運動があったのだろうか。これは、被差別者

・被抑圧者の声を社会政策の議論に組み込む努力を怠ってきた側にも問題がある、と考えられるのだが、日本にけるさまざまな被差別者・被抑圧者の抵抗運動は、アメリカの人種・民族による差別を無くしていこうとする運動ほどの力を持ちえなかったのではないだろうか。アメリカにおけるアイデンティティ・ポリティクスは、差別や抑圧に対する激しい抵抗運動をくぐり抜けてできあがってきたものと言える。としたら、その「修羅場」を体験していない日本のフェミニズムが直面している困難とは、アメリカのそれとは、少々異なる、と考えられる。

第2波フェミニズムの歴史を溯ることで気づいたことだが、日本のフェミニズムにおいては、あまり差異のフェミニズム的発想がなかったような気がする。すなわち、女性を取り巻く文化・伝統とえそれらが女性を劣位におく性質があっても、女性性が軽視されている、とみなさなかつた。これはとりもなおさず、日本独自のフェミニズムの課題が多く存在していることを意味する。文化を強調すれば平等が損なわれる。これは、どのような社会でも直面する可能性のあるひとつの「原則」であろう。フレイザーは、今必要なのは、承認と再配分を繋げる努力であると述べている。彼女が提示している、そのための処方箋を、日本のフェミニズムにそのまま適応させることはできない。しかし、日本独自のフェミニズムの課題に取り組んでいく過程で、その有効な治癒策が見つければ、それはそれでよいのではないだろうか。正義論、平等論を組み立てるための議論の対象の選択、かつ議論の成果を社会に還元する努力、それらを怠ってはならない。袋小路の打開策は、案外身近な所にあるようである。

[注]

- (1) Nancy Fraser, *Justice Interruptus: Critical Reflections on the "Postsocialist" Condition* 1997 (仲正晶樹監訳『中断された正義—「ポスト社会主義的」条件をめぐる批判的省察』御茶の水書房 2003年)
- (2) Judith Butler, *Gender Trouble: Feminism and Subversion of Identity* 1990 (竹村和子訳『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社 1999年)
- (3) フレイザー『中断された正義』p. 282
- (4) 反本質主義フェミニストは、このような断定の仕方はできないはずである。セクシャリティは、文化、政治両方によって構築されたものであり、そうするとゲイ、レズビアンの人々は1 価的集団モデルとしては定義できない。

(研究紀要編集委員会は、編集発行規程第5条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する、2005年10月18日付)。